

## 「酪農を志す」

静岡県立田方農業高等学校 動物科学科 3年 鈴木 菜々美

私が初めて牛に触れたのは中学生の時参加した田農のオープンキャンパスでした。元々動物が好きで動物の勉強をしてみたい、そんな気持ちでいた私の心を一気に奪ったのは牛舎で飼育している乳牛たちでした。人が近くに行くと構って欲しいとばかりに愛嬌を振りまいてくる懐っこい牛達。こんな可愛い動物の世話が出来るなんて最高、と一瞬にして「私ここに入学する!」と母にその場で宣言したのを覚えています。そしてただ可愛いから、世話してみたいからという気持ちで入学し、酪農の理想と現実のギャップに驚くなんて予想もしていませんでした。まず始まったのは朝早い牛当番、授業だけで関わると思っていた牛の管理は学校生活のルーティンと言っているほど当たり前。慣れない早朝での起床、体が慣れず辛いとほやくことも一度や二度ではありませんでした。そして牛の管理だけでなく牛たちの敷き藁や、ロールなどの飼料に関わる実習もあります。ただ世話のみ行うのではなく、重い藁の梱包や濃厚飼料を運んだり、広大な牧草地上で炎天下の中牧草集めを行ったり、筋力勝負体力勝負といったきつい作業も牛の飼育のために欠かせない仕事であることを知りました。

何よりも驚いたことは可愛いと思っていた牛たちが予想を裏切って来たことです。初めて牛がいる状態に入った牛房掃除、まるで敵対視するような目をして追いかけられ初めて牛に対して恐怖感を覚えました。搾乳の時には機嫌が悪いと脚が飛んで来ることも、ど突いてくる牛もしばしば。可愛いだけで飼育はできないのだと体感する出来事ばかりです。

生産動物コースに入ってから最初の頃は牛に対して抱いていた可愛いという気持ちも、実習や作業に対しての意欲も減少していったと言っても過言ではありませんでした。

そんな私が今では酪農を志し、作業を意欲的に取り組むようになったのは日々の管理によく慣れてきた頃です。自分の作業で必死だった時と比べると、牛に対しても気を回せるようになったと思います。最初は何を考えているのか分からなかった牛の機嫌を感じ取ることができるようになったり、自らの行動で牛が嫌な思いをしないように作業したりできるようになりました。牛に対して気遣って作業をするようになってから、私に対する牛の行動も変わっていったと思います。ブラッシングをしていると構ってほしそうに頭を擦り付けてくる仕草や、ふとした時に急に舐めてくる仕草は牛に対してやはり愛しい気持ちが溢れました。

私の酪農に対する思いが一番大きく変わったのは搾乳牛でも最後には出荷となることを知ったことです。

愛情持って世話していた牛が乳牛として引退を迎え、人のために最後まで使命を全うしていった姿を思いだすと飼育されていた日々が幸せであったかと考えます。私たちが命をいただいて生きていることに感謝し、牛にとって快適な環境を整えたいという思いで日々の実習も全力で取り組んでいます。

今では牛舎にいる時間が学校生活の中で一番幸せと言ってもいいほどで、辛い実習も意欲的に活動します。そして自然と将来の進路は酪農に関わるものと、決まっていきました。

私には酪農の世界に入ったら叶えたい夢があります。ひとつは家畜人工授精師になる事です。乳牛が生乳を生産するためには周期的な種付けをし、子を出産することが必要です。

私は飼育している牛が無事出産するととても嬉しい気持ちになります。また哺乳の時には産まれたての子牛が一生懸命に乳を飲む様子は強い生命力を感じ、自分も負けていられないと元気を貰えます。人工授精師を目指そうと思ったのは種付けを見学させてもらった際にその獣医師さんの姿に感動したからです。自分の技術によって命を生み出すことが出来る家畜人工授精師という職に魅力を感じました。人工授精師に求められることとして、高い観察力や授精に関する知識と技術があります。そのために日々の動物の管理や、観察をしっかりと行って行きたいです。高校卒業後は家畜人工授精について学ぶことが出来る学校に進学し、技術面においても優れていると認められるような家畜人工授精師になりたいです。

2つ目は地元の酪農を支える一員になることです。

私の地元丹那地域で20年前に33軒あった酪農家は9軒に減少。昔と比べると飼養頭数、飼養農家数は激減してしまいました。高齢化や飼料価格の高騰などにより酪農経営が難しくなってしまうことが要因です。私が丹那地域の酪農を支えたいと思ったきっかけは「丹那ブラック&ホワイトショー」という共進会でした。この共進会は地元の酪農を盛り上げようと続けられてきたものですが、酪農家の経営の圧迫や高齢化の影響を理由に半世紀にして幕を閉じることになりました。共進会の際に、酪農家の方々のお話を聞く機会が多くありました。どの農家さんも「経営が厳しいところはあるけど、支えあっていこうね」という言葉を発していたのが印象に残っています。丹那の酪農家の方々が経営難のなかでも支えあっていること、酪農に対して熱い思いを持っている姿を共進会で身をもって感じました。

そんな農家さんたちの思いや、丹那の酪農が衰退していったらとても悲しいです。そんな思いから私も農家さんたちのように、少しの力ではあるけれど丹那の酪農を支え盛り上げていく一員になりたいと思うようになりました。将来は家畜人工授精師の資格を生かし丹那の酪農に関わる職に就きたいと思います。そして酪農を盛り上げようという思いで始まった「丹那ブラック&ホワイトショー」をいつか復活させることが私の目標です。まだまだ酪農初心者の私ですが酪農に対する熱い気持ちを忘れず、進路実現に向けて今できることを全力で取り組んでいきたいです。

多くの命を誕生させ、未来の丹那の酪農を支える一員になるために。